

時代を駆ける：岡部健／9 がんになって見えた闇

◇TAKESHI OKABE

《昨年1月末に胃がんが見つかった》

前年の9月に北アルプスに登った時、踏ん張りが利かないと感じました。貧血がひどくなり、看護師に言われ検査を受けたら、そのままバタバタと手術になりました。

病室に窓はありましたが、ベッドからは空だけで風景が見えない。もともと自然が好きで、外界から閉ざされていると気がめいる。「まあいいか、逝っちゃっても」と考えることもありました。

そんな時、ずっと欲しかった800ミリの望遠レンズが頭に浮かびました。自宅に居ながら庭の野鳥が撮れる、退院したら買おうと決めたら、「早く家に帰りたい」と意欲がわいてきた。他人から見ればつまらないものに、人は支えられているんだと感じました。

《昨年4月、自らの判断で退院。がん患者の側になり、自分の問題として死を思った》

家で庭の緑を見ながら一服したら、ホッとしました。レンズはすぐ購入しましたが、5キロぐらいあって持ち上げられない。体力も体重も落ちていました。ガーゼ交換は自分でして、診療所の看護師に抗生物質を点滴投与してもらいました。

山の頂上に立っているように感じました。右側が今まで生きてきた世界で、左側が死の闇。その闇に下りていく道しるべが、現代社会には見当たらない。長生きすることが絶対的な価値になり、死という不条理なものに気持ちの整理をつけられない。医療はその手だてを持っていません。支えになるのは地域のコミュニティーや文化、土着の宗教性でしょう。でも残念ながら、日本はそうした価値観を壊してきた。

《告知のあり方にも複雑な思いがある》

私は、自分の病気を知りたい患者には真実を伝えてきました。一方で、人が未来を知ることは幸せなのかと、がんを体験して強く感じました。

病院で余命3カ月と告知されたある患者は、その言葉が頭にしみついて「あと何日」と数えていました。年単位で生き続ける例もあるのに、患者には不安と絶望感だけが残り、普通に過ごせたはずの時間まで奪われてしまう。「告知ありき」の流れには疑問を感じます。

=====

聞き手・下桐実雅子／火～土曜日掲載です

=====

■人物略歴

◇おかべ・たけし

日本ホスピス緩和ケア協会理事。61歳（写真は10年ほど前、燕岳〈つばくろだけ〉を背に。毎年のように北アルプスに登った＝本人提供）